



海事博物館所蔵ポスターの再整理と近現代における 商船広告：仲島忠次郎コレクションを中心として

菊地，真
藤本，奈緒

(Citation)

海事博物館研究年報, 52:30-36

(Issue Date)

2025-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100496297>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100496297>



海事博物館所蔵ポスターの再整理と近現代における商船広告 ～仲島忠次郎コレクションを中心として～

神戸大学海事博物館専門員（学芸員） 菊 地 真
神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程 藤 本 奈 緒

1. はじめに

2023年末から2024年にかけて、海事博物館所蔵ポスターの再整理を行った成果に基づき、ポスターから窺える、近現代における商船の広告の傾向を紹介する。本資料群の中心となっているのは、良く知られる「仲島忠次郎コレクション」（以下、仲島コレクションと略）であり、仲島コレクションについて最初に概説し、次いで整理したポスターの特徴を述べていく。

2. 仲島忠次郎コレクションについて

仲島忠次郎コレクションは、仲島忠次郎氏が集めた商船関係の諸資料からなるコレクションである。生前、神戸商船大学教授の松本 哲先生を介して神戸商船大学海事資料館に1980年頃に寄贈されたと言われ、仲島氏が最晩年に資料を一括して寄贈したと推測される¹。

仲島コレクションの概要は、当館顧問の樋口元巳先生が「仲島忠次郎氏の蒐集箱」（文献1）として紹介したのが最初である。

本格的な整理は2003年に行い、当時館長をされていた石田憲治先生が2005年に報告書『仲島忠次郎コレクション目録』（文献2）としてまとめている。内容については樋口氏が「中嶋忠次郎コレクション再説」（2003；文献3）、石田氏が「仲島忠次郎コレクション」（2005；文献4）として紹介した。

文献3で樋口氏が分けた項目を表1に示す。国内外で共通するのだけを見ても、会社案内、メニュー、コースター、ラベル、乗船券、絵葉書、ポスターと並び、船にまつわるものなら何でも、という仲島氏の収集方針が一目瞭然である。合計で実に約8,600点、「商船関係諸資料」と呼ぶほかない、資料の多彩さがうかがえる。

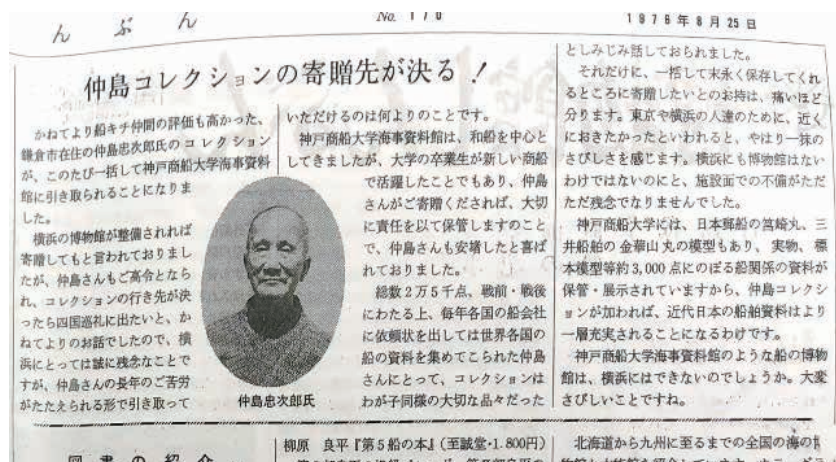


図1 「仲島コレクションの寄贈先が決る！」
（『博物館しんぶん』170号、1976年）

1 仲島忠次郎（1902-1982?）。1902（明治35）年頃生まれ、おもに鎌倉市に居住した。石田憲治氏はかつて、仲島コレクション紹介時に1903（明治36）年頃生まれ、1981年頃、つまり78歳頃没したと記載した。生年は新聞にインタビュー記事があり（「私のコレクション：ラベル／海への郷愁に誘われて1万点に結ぶ世界旅行の夢」1954年2月9日、読売新聞。）、記事に52歳と書かれているため、生年は1902年となる。没年については今回、宇佐美昇三氏が1982（昭和57）年春に仲島氏宅で取材したとの記述を発見した（宇佐美昇三2000「『笠戸丸』マルチメディア用ソフトウェア試作資料（3）－台湾航路就航時代－」『駒沢女子短期大学研究紀要』33、pp.51-68；55pにあり）。そのため少なくとも1982年以降没で、年齢は79歳以上、となる。

仲島コレクションの海事博物館（当時は神戸商船大学海事資料館）への寄贈時期は、図1に示した横浜海洋科学博物館「博物館しんぶん」（170号、1976年8月25日）の記事、「仲島コレクションの寄贈先が決る！」と、寄贈資料の年代の上限から、1976年であると推測される。

表1 仲島コレクションの分類別資料点数

	日本	外国
会社案内等	1603	2935
雑纂（その他）	20	390
キャビンプラン	113	825
メニュー	68	148
コースター他	18	7
ラベル	119	232
荷札	69	196
乗船券	40	13
フラッグ	7	64
絵葉書	177	279
ポスター	186	109
時刻表	140	
船舶運営会資料	54	
伝票	1	
乗船申込書	27	
飾り物	24	
団扇	9	
写真	33	
神社関係資料	102	
カレンダー		18
看板他		5
造船会社等パンフレット		419
会社チラシ類		53
リプリント		76
新聞雑誌		52
総数	2810	5821

※文献3（樋口2003）による。重複しているものは計上していないため、厳密には資料件数である。

その後2009年に、海事博物館企画展「戦前・戦後のポスターにみる日本商船」が開催され、記録

として発行された図録『海事博物館企画展図録2009』（文献5）に、主要なポスターが白黒画像と一覧表で掲載されている。ポスターに限れば、考察等は無いのものの、文献5が内容を端的に知ることが出来る。（菊地）

3. 調査・整理方法

今回は2024年企画展でポスターの一部を紹介する意図もあったため、まず大阪商船、次いでその他商船の戦前のポスターを調査し、文献5のリストに従って、保管してある現物と照合しながら改めて目録を作成した。文献5では、大阪商船がJOS、関西汽船はJKNと、社名を意識した符号を与え、JOS001というように、符号ごとに通し番号としている。仲島コレクションとの対応関係は、一番の基準である文献2と対照して確認した。

目録を作成すると同時に、海事博物館にある大型スキャナーを用い、高精細の画像データを作成した²。2024年企画展で10数点のポスターを展示したが、この画像データをもとに複製を出力して展示した。作業には筆者のうち、藤本がおもに従事し、菊地が作業の確認等に当たった。

海事博物館所蔵のポスターは殆どが仲島コレクションの一部として収蔵しているポスターである。しかし本稿の副題で「…を中心として」としたように、今回報告するポスターは仲島氏以外からの寄贈、収集によるポスターも含めている³。

（藤本、菊地）

4. ポスターの特徴

概要 今回再確認したポスターの総件数は、389

2 文献5の掲載画像は小さく解像度は十分ではない。ポスターは見栄えがするため企画展でしばしば展示されてきたが、一部は端部が破れるなど痛みも目立つため、6・7年前に当館特別専門員が簡易的に裏打ち修理した。今後の資料保存も考えて、改めて高解像度のデータを保存することとした。

3 より正確に言えば、文献5でポスターを「仲島コレクション」として紹介しているのは間違いで、「海事博物館のポスター・コレクション」としなければならぬ。当時、文献5の整理に当たった方がすでに当博物館にいないため未確認の点はあるが、これは作業時の混同による。

仲島コレクションの資料は収蔵庫で小箱に分けて独立した棚に収納しているが、ポスターは大判であるため当初から別の棚にしまっていたと思われ、他の寄贈・収集ポスターも恐らく同じ棚にしまわれていた。文献5の作業時に、文献2に必ずしも依拠せず、収蔵庫にある船舶関係のポスターを、会社などの別で分類し直して通し番号を与えたため、仲島コレクション以外のポスターも一括して文献5に記載されたと思われる。

ちなみに、文献2の海外ポスターはほとんど船会社と航空会社のポスターが含まれているが、文献5では航空会社と見られるポスターは除外したのか、採録されていない。逆に文献5では、文献2のリストに無く、当博物館データベースに登録されている、過去収蔵されてきた、さまざまな由来のポスターが含まれている。

今回の再整理では、文献2の一覧表に示されているポスターのタイトル、会社名等、枚数の情報と、文献5のタイトル、会社名等を突き合わせて確認した。さらに海事博物館データベースにあるポスターとも、突き合わせて確認した。以上の作業で仲島コレクションとそれ以外のポスターとを目録上で区別した。今回作業後の収納では、目録リスト上でポスターを区分したほか、登録番号が連続するその他のポスター、例えばJGV官公庁などは、仲島コレクションと分けて抜き出してまとめた。

件である⁴。このうち仲島コレクションのポスターは、国内179件、海外107件の計286件である⁵。

ポスターの年代は、戦前は1920年代からで、30-40年代が最も多い。戦後は1970年代前半までが大半で、1980年代初頭がわずかにある。発行年の明確な資料で言えば下限は1923年、上限は1983年である。ただし1980年代のポスターは「官公庁ほか」と分類してある一群に限られ、商船で見れば1975年が下限である⁶。

表2 海事博物館所蔵のポスターの概略

主な分類	件数		備考
大阪商船 (JOS)	54	(51)	1930-70's
商船各社 (JOT)	44	(30)	主に戦前
関西汽船 (JKN)	98	(93)	主に戦後国内
東海汽船 (JTK)	17	(5)	主に戦後国内
官公庁他 (JGV)	55	(0)	主に戦後
海外船社 (FSC)	89	(74)	
航空関係 (PST)	33	(33)	海外

※分類の符号は文献5に準拠した⁷。件数の () 内の数値は、仲島コレクションのポスターの数である。

海外のポスターは、船舶関係と、航空関係で分けた⁸。船舶はフランスとイタリアの会社、航空機

はドイツが比較的多いが、系統立ってはいない。

国内のポスターは内航が多い。戦前は日本の統治下にあった朝鮮、台湾を中国や満州と同じく外航と見做せば、外航と内航は約半数程度となる。船会社で言えば大阪商船が多く、ほかに近海郵船、摂陽商船、日本海汽船、北陸汽船、東亜海運、東海汽船、関西汽船などがある。戦後の国内航路はほとんどが関西汽船で、戦前のポスターに比べるとさらに船会社が偏る⁹。(菊地)

商船の広告：1930～1940年代 所蔵するポスターは商船の会社と年代が偏っている。例えば大阪商船は1905（明治38）年からポスターを作成しており、1920年代までの約25年は当館ポスター群では述べられない。戦後も国内航路は本州と北海道、四国、九州、あるいは島嶼を結ぶ商船はいくつも挙げられるが、東海汽船、関西汽船に限られる。しかし1930～70年代に限れば商船の広告の傾向を通覧でき、貴重な資料である。

まず戦前の1930～40年代で明確なのは、1920年代までにポスターの主流であった美人画が認めら

4 表1と同じく、表2や本文中のポスターの数は、タイトルに基づく件数である。ポスターは全く同じものが複数枚所蔵されている場合がある。

今回調査した結果として、文献2の一覧表では、同じ1枚のポスターを、誤って再度記入していると推測される例が複数件ある。また文献5と突き合わせても、所在が確認できないポスターが数点あった。また文献5についても、現物の所在が確認できなかったポスターが数点あり、現物未確認のものは今回、欠番とした。

5 表2は、文献5を基礎として、今現在、現物の所在が明確なポスターの実数で報告することとした。() の内数は、仲島コレクションとして確実な点数である。

ちなみに文献2でリストにあるポスターの件数は国内186、海外109である。文献2では全く同じポスターは1件2枚のように記載して、件数を資料数とみなしており、数の正確な一致は難しい。

6 注1で示したように、仲島コレクションが寄贈されたのは1970年代後半、1976年頃と推測される。ポスターのこの年代は整合的である。

7 表2の資料数は、文献5を元に再整理で所在確認できた実数で記載した。文献5に記載のうち欠番、所在不明の資料は含まない。全く同じポスターが複数ある場合は1点として数え、目録上で枚数を記録した。なお海外のFSCに内容的に航空関係5点と官公庁関係2点があったが、登録番号はそのままとし、表2の換算では、JGV、PSTに含め集計した。

8 仲島コレクション受贈時には外国語表記のポスターを会社別で分けている。文献5では航空を分け、船舶と見られるポスターだけを記載している。今回、航空関係のポスターを、文献5にならって分類符号を「PST」とし、番号を改めて付けた。ただし注6でも述べたように、文献5の作業時に何点か航空会社や日本のポスターが海外（船社）の分類に混じっていたのを確認した。海外（船社）に混じっていたポスターは、混乱を招くため、既に付けられた分類番号は変更せず、表2の集計上、国内や航空関係に振り分けた。

9 文献2を通覧する限り、仲島コレクションのポスターに関しては、明らかに関西の関西汽船、大阪商船が主体で、次いで海外の各社が量的に次ぐ。このような偏りの一因は、仲島氏の資料収集方法に依るところが大きいであろう。

仲島氏の収集方法は、仲島氏のインタビュー記事によれば、絵葉書など一般に販売されているものは購入したが、おもに内外問わず船会社に手紙を出して依頼し、航路案内からラベルにいたるまで送ってもらっていた（「私のコレクション：仲島忠次郎氏の船の絵はがき」1961年2月23日、毎日新聞）。この方法は、まったく先方の好意によっているため、返事が貰えなければそれまでとなる。

ただし筆者の一人である藤本の調査によれば、仲島氏が集めた資料の一部は、横浜みなと博物館に所蔵されており、日本郵船のポスターが20点前後含まれるという。仲島コレクション中に日本郵船のポスターがほぼ無いのは、このためと思われる。実際、仲島氏は生前に横浜みなと博物館の前身である横浜海洋科学博物館に資料を寄贈している。「昭和53年度には柳原良平氏より船舶写真・ネガ等の一括寄贈と仲島忠次郎氏からの船舶絵はがき、航路案内等の資料寄贈があった。」（『横浜海洋科学博物館20年の歩み』1984、横浜海洋科学博物館）とある。ポスターの寄贈が1978年時点であったかは不明である。

ちなみに1976年の横浜海洋科学博物館「博物館しんぶん」（170号、1976年8月25日）には、「仲島コレクションの寄贈先が決まる！」との記事が載っている。記事では「このたび一括して神戸商船大学海事資料館に引き取られることになりました。」とある。経緯は文献1にも簡単に記されていて、横浜に寄贈する意思もあったが、横浜の博物館整備が進まず、仲島氏の元気なうちに預け先を決めたいとの事情で海事博物館に寄贈された。もっとも仲島氏によれば、複数ある資料などは国内外の関係先に寄贈していたようで（仲島忠次郎 1966「寄贈の難しさ」『Kaibun：総合物流情報誌』464号）、1978年の横浜海洋科学博物館への寄贈は重複分や横浜に関係する資料であったかもしれない。仲島コレクションの全体像という意味では、横浜みなと博物館の資料は注意すべきであろうか。

れず、着物や歌舞伎、力士といった、日本固有の画題も影を潜めている。この時期の画題は、船舶と、船旅・目的地の景観である。また作家も特徴的で、大阪商船は嘱託として働いていた大久保一郎が、大半のポスター原画を手掛けている。ほかにも戦前のポスターで記名からたどれる持田卓二、河合 間など、職業画家・デザイナーとして活動していた者が多い。

端的に言えば、商船会社が、自社が運航する航路への誘客を追求した結果、大連（満州）、基隆（台湾）、上海といった目的地、ルート、貨客船の設備（規模、速さ）やサービスを前面に打ち出して、具体的な貨客船運航の中身で他社との差別化を図っていたからであろう¹⁰。

日本では明治初頭の1880年代から旅行、観光は市民の余暇として拡大をしていった。大阪商船の内航航路で認められる、大阪・神戸から瀬戸内海、大分や宮崎のポスターは普段は見慣れない土地への旅情をかき立てたと思われる。日本列島外のアジア諸地域は、なおさら魅力的な存在であったろう。国内の造船所で優れた性能の貨客船が建造され、船舶と、その航路の宣伝は日本の国威発

揚にも繋がっていたと言える。

後者の、船舶や航路を持っていた国家、ないしは帝国主義的な意味を示す例として、北日本汽船「我等の運命は海に在る」（1935、平澤大暲・画）を挙げる¹¹。このポスターは裏面に紙が貼付されており、1935年の新年挨拶とポスターの作製由来が書かれている。現代でも会社が年末年始のあいさつ回りでカレンダーを配る風習が残るが、このような広報・営業は江戸時代の広告媒体である引



図2 「我等の運命は海に在る」
（北日本汽船, 1935, 平澤大暲・画）

謹みて新春の御挨拶を申し上げます
非常時一九三五年は愈々到来いたしました。我が国が更に新しき試験に当面する年柄と申しますが其年度の御挨拶を申し上げるに當りまして烏詩がましくも「我等の運命は海に在る」の標語を掲げて東天紅なる我国土の面影を平澤大暲画伯に嘱し作成高覧を乞ふ所以は画面自体が雄弁に語り呉る所と存じますが之を作成するに至れる「インスピレーション」を茲に少しく記述することを御許し願ひます。

昭和九年七月平澤画伯が其郷里小樽市に帰省個人展を催されましたが同氏が「日出」の情景描写を深く研究せられ数種の商品がありましたので昭和十年新春恒例の「ポスター」画題として雄大なる海上の日出を選びたく「ヒント」を得たと全国民関心の重点たる海軍々縮条約改定問題は今年国民の総意に基づき必ずや力強く適切に解決せられ世界の平和を招来する基礎が定めらるるに至るべく我等海運産業に従事する者も一層の緊張努力を要する所と信じますとともに我国一般産業界が更に更に興隆を続け以て暗雲將に漲らんとする太平洋をして麗かなる旭光を映する文字通りの太平洋たらしめ我国運の悠久安寧を旭日の如くあらため度を庶幾して止まず往年豊太閤が年頭に際して詠したる七絶

海天遙見五雲揚 萬里晴波映旭光
皇化湯々潤而大 春風吹度太平洋

を想起し我等現代国民の吟唱亦茲にあらざるべからず實に我等の運命は海にあり、我等の将来は海の幸を拓くにありと信ずるものであります。斯様なる「インスピレーション」を此画に託して表現致度く我が国テムベラ画界の第一人者たる同画伯の努力を乞ひました次第であります。

茲に新春の御挨拶を申し上げるに當り先づ以て各位の御清福御隆運を祈り上ますと共に弊社亦微力ながら一心に其業に励み海運業者の一員として責務を果たし度いと存じます。
一層の御引立御鞭撻を御願申上ぐる次第であります。
昭和拾年正月

北日本汽船株式会社

史料1 「我等の運命は海に在る」添付説明書（旧漢字は改めた。送り仮名はそのままとした。）

10 船自体がある種、魅力的な画題になっていたと言える。この点に関して、満州航路に絞った考察を筆者の一人、藤本が別稿で考察している（藤本2025）。

11 作家としての平澤大暲については藤本（2025）も参照のこと。

札の流れを引き継いでいる。以下、史料1として全文を掲げる¹²。

史料1は北海道の小樽出身の画家、平澤の個展で見た絵画をきっかけに、海上から日の出を俯瞰するポスターの画題を発想し、平澤にポスター原画を依頼したことが分かる¹³。東北アジアを手前に配し、日本海の航路と日本列島を上空から俯瞰する構図は、当時活躍した吉田初三郎の鳥観図にも通じるものがある。本文で注目される点の一つは、「全国民関心の重点たる海軍軍縮条約改定問題」とのくだりである。第一次世界大戦後、1930年にロンドン海軍軍縮会議が開かれ、各国海軍力の制限として、主力艦建造休止期限の5年延長、英・米・日の補助艦保有比率が定められた¹⁴。条約は軍備なので直接影響しないが、本文は「我等海運産業に従事する者も一層の緊張努力を要する」と、欧米諸国との関係改善が日本の貿易輸送の安定につながると海運業界で認識されていたことが窺える。また、「我等の運命は海にあり、我等の将来は海の幸を拓くにありと信ずる」とあって、島国である日本が、特に明治期以降、国際貿易によって産業を成り立たせてきた事実と、海運業界が貿易で日本を支えているとの自負が垣間見

える。

ポスターの絵に託し、世情とあわせて海運の発展を高らかに述べる本文からは、日本の帝国主義的思考が市井にも広く共有されていた様子が伝わってくる¹⁵。
(藤本、菊地)

商船の広告：1945～1970年代 戦後の1950年には、「日本再建は先づ海運から」と題した大阪商船のポスターが出された。同年には占領の続く沖縄までの航路も開設された。戦後の大阪商船で目を引くのは、1950年代後半から復活していく海外航路である。ヨーロッパやオーストラリアのほか、戦前の移民航路や南米航路も復活し、中南米移民の足として利用される。「南米の広い野が呼ぶ丘が呼ぶ!」といった標語は、戦前と変わらず、政策として移民が奨励されていた時代を映し出している。

戦後の国内線のポスターも、船や風景を主とするところは変わらない。東海汽船は伊豆諸島の観光ポスターの色合いが強く、ポスターの主題だけでは作製年代が特定し切れないが、関西汽船との対比から1960～70年代が中心と推測される。

最も多い関西汽船は、瀬戸内海の小豆島や淡路



図3 戦後の大阪商船のポスター
(左から。「日本再建は先づ海運から」1950年頃；「日本一琉球 白龍丸白雲丸」1951年；「JAPAN-AUSTRALIA DIRECT SERVICE」1957年；「南米の広い野が呼ぶ丘が呼ぶ!」1954-55年)

12 史料の文中にある「日出」に該当する作品は、平澤の作品集である『平沢貞通画集』（平沢貞通 1992 アオイコーポレーション）にも無く、どのような絵画かがかい知れない。平澤は、北海道の広大な地平線が広がる風景画を何度も描いており、地平線を得意としていたと評される（矢部恵子2022「平沢貞通の『観照』」による「地平線」を画題とした作品についての一考察）『京都芸術大学大学院紀要』3、pp.28-38）。この史料で言及される「日出」を描いた作品も、地平線の向こうからのぼる日の出を臨む絵であったのだろう。

13 平澤が自らの郷里小樽市に帰省して開いた個展を、北日本汽船の社長が見たのが契機と述べている。北日本汽船は樺太の太泊を本社に1914年（大正3）に設立された会社だが、北海道側の主な発着港は小樽、次いで函館であった。設立上、本社は樺太であったが、実際の本社機能は小樽営業所にあったという（田邊貞造、畠中隆輔編（1939）『北日本汽船株式会社二十五周年史』北日本汽船株式会社）。ここに北日本汽船と平沢の接点がある。

14 ロンドン海軍軍縮条約は締結後も海軍をはじめ反対する意見があり、1934年には改正のため予備交渉が持たれていた。しかし、交渉は結局不調に終わり、日本は1936年に脱退し、条約は英・米・仏のみで改正された。日本が軍備増強を図り、太平洋戦争に至る戦争の歩みを進めていったのは、周知の通りである。

15 間もなく戦後80年、昭和100年となる今日、私たちは輝かしいだけでは語れない、海を通じたアジアの諸国・人々との関わりを、どう捉え、構築し直せているだろうか。



図4 戦後の関西汽船のポスター
 (左から。「瀬戸内海を豪華船で楽しく早く」1960年代；「別府航路」1960年；
 「白と緑の豪華船 神戸⇄日向フェリー」1973年；「瀬戸内海へクールな船旅」1970年代)

島、鳴門、別府や琉球諸島が行き先である。1950年代から1960年代は、船や海などをイラストでデザインしたポスターが多いが、写真製版技術の影響であろうか、船や海、船上の風景写真を用いたポスターが次第に増加していく。明確に線引きは出来ないが、1970年代にかけて増加し、イラストではなく、写真で航行する船と海、船旅をする人々を画面いっぱいにレイアウトしたポスターが主体となっていく。

また被写体として女性が多用されるのも時代の特色と言えよう。船上で旅を楽しむ女性や、水着姿の女性が主役のポスターは、着物姿とはまた違う形で、“女性”を強調して扱っている例と言える。

船そのものがポスターの画題となる例も依然、一定の割合を占めるが、船の性能や外観を魅力として押し出した戦前とは明らかに異なっており、航行する船の風景写真で、旅情をどう醸し出すかに力点が置かれているように受け取れる。(菊地)

5. おわりに

2024年度の調査成果として、博物館所蔵のポスターについて改めて概要を紹介した。仲島コレクションのポスターについては文献5に基づいて紹介や借用されることが最近多いため、他由来の資料も含まれることを本稿で示し、従来の誤りを修正する点に重きを置いた¹⁶。

戦前の1930・40年代のポスターについては代表的なものを2024年企画展「神戸からの船出」で紹介した。企画展図録にポスターを採録し、個別の

説明を加えるよう努めたので、こちらも参照して頂きたい。戦後のポスターは関西汽船の資料など、さらに分析可能と思われるが、時間の都合で十分に果たせなかった。他日を期したい。

なお本稿の成果は、2023年度アジア歴史研究助成（JFE21世紀財団）による。(菊地)

参考文献

- 石田憲治（2005）「仲島忠次郎コレクション」『海事博物館研究年報』33、pp.9-12
- 神戸大学海事科学部海事博物館専門委員会編（2005）『仲島忠次郎コレクション目録』神戸大学海事科学部海事博物館、261p
- 神戸大学海事科学研究科海事博物館専門員会編（2009）『海事博物館企画展図録2009』神戸大学海事科学研究科海事博物館
- 田邊貞造、畠中隆輔編（1939）『北日本汽船株式会社二十五年史』北日本汽船株式会社
- 樋口元巳（2001）「仲島忠次郎氏の蒐集箱」『海事博物館研究年報』29、pp.6-8
- 樋口元巳（2003）「中嶋忠次郎コレクション再説」『海事博物館研究年報』31、pp.10-13
- 藤本奈緒（2025）「仲島忠次郎コレクションの中の満洲観光ポスター調査」『美術史論集』25、pp.135-146
- 横浜海洋科学博物館（1984）『横浜海洋科学博物館20年の歩み』1、横浜海洋科学博物館、108p

16 ポスターに関しては、神戸商船大学の大学祭「深江祭」のポスターや、海事博物館の企画展ポスターなども存在するが、大学関係資料として分けられており、本報告に含めていない。このため、所蔵ポスターの点数はいま少し増えると思われる。

コラム：海事蒐集家の収集手法

個人がコレクションをどう作っていくのか。絵画のようなファインアートであれば、作家の個展や画廊、オークションを通じてとなるが、歴史民俗資料となると、こうはいかない。

神戸大学海事博物館に約1万4千点のコレクションを寄贈された仲島忠次郎氏の場合はどうだろうか。仲島氏は、子供の時に家の前に住む日本郵船の乗組員からしばしば船の絵葉書を貰ったのが始まりだと言う。船乗りになろうとも思ったものの、あきらめて船に関する物の収集を、と思い直したそう¹⁾。

それからは港に通い、土産物の絵葉書に留まらず、造船所に行き、内外の船会社に手紙を送って依頼し、航路案内や会社案内、メニュー、コースターなど、あらゆるモノを郵便で手に入れたという²⁾。物産商として働いていた時は仕入れの仕事ついでに、あるいは実際に船に乗って、収集を重ねた。

実はこれと似た方法を採用していたのが山田早苗氏である。山田氏は芦屋市在住の歯科医であるが、子供のころから船に親しみ、何度も船に乗られていた。ことに戦後、日本の商船について整理され、まとまった情報が皆無であったことから、自ら資料を収集して「日本の商船隊行動記録集」を作り上げられた。山田氏の資料は現在、山田コレクションとして神戸大学海事博物館に収められている。

山田コレクションの特色は、太平洋戦争で沈没した日本の商船の記録を、丁寧に台帳に整理し記載した点にある。商船の一般要目は「船名録」で知れるが、一隻がいつ建造・改修され、どの航路を運航していたか、といった細かな情報は図書でもたどり切れない。山田氏はそこで、各船会社に直接問い合わせる方法を思いついた。

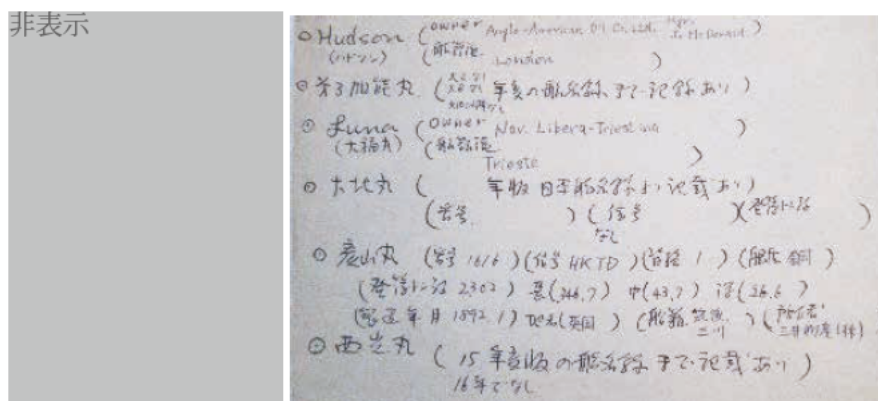


図 山田早苗氏による行動記録調査の往復葉書（返信葉書の表・裏面の例）

図は、山田氏が実際に使った往復葉書の返信側である。返信欄に船名録への記載の有無や、船舶の要目などが記入されている。山田氏が船会社に知りたい船の要目や行動記録を問い合わせ、会社側が応じていたものと推察される。地道な作戦であるが、山田氏も仲島氏も、その収集に賭ける熱心な気持ちが海事関係者に伝わったことであろう。

そして神戸大学海事博物館は、このような船に関する膨大なコレクションの保管を引き受ける立場となった。両コレクションはすでに概略公表され、機会のある度に一般市民や関係者、研究者ほかに幅広く利用されている。寄贈者の思いにも応えるべく、資料を通じて日本の商船の歴史や船の魅力をお伝えしていきたい。（菊地）

注)

- 1) 「いろいろマニア16：船の写真 仲島忠次郎さん」『朝日新聞』1953（昭和28）年6月30日
仲島氏を紹介する記事は、主要紙のインターネット検索ではほか2件が挙がる。内容にはあまり大差がない。
「私のコレクション：ラベル／海への郷愁に誘われて 1万点に結ぶ世界旅行の夢」『読売新聞』1954（昭和27）年2月9日
「私のコレクション：仲島忠次郎氏の船の絵はがき」『毎日新聞』1961（昭和36）年2月23日
- 2) 仲島氏は自身のコレクションに関する随筆類を数多く寄稿している。収集に多く触れている例として、以下が挙げられる。「僕は紙屑屋」では、「生涯を賭けた甲斐あって、世界の有志から支援を受け、八分通りのものをそれぞれに分散寄贈。」と述べており、1978年掲載であるから、神戸商船大学海事資料館（現在の当、海事博物館）や横浜海洋科学博物館への寄贈を指すと思われる。
仲島忠次郎（1966）「寄贈の難しさ」『Kaiun：総合物流情報誌』464号、pp.122-123。
仲島忠次郎（1975）「紙屑屋は曰う」『共催新報』16-11号、1975年、pp.64-66。
仲島忠次郎（1978）「僕は紙屑屋」『百万塔』45号、pp.51-52。